

平成27年度 事業報告書

(事業年度：平成27年4月1日から平成28年3月31日)

一般社団法人日本ろう者スキー協会

1. 平成 27 年度事業報告

1. アルペンスキーチーム

(1) 今年度活動の方針及び達成目標

- ① 強化選手育成のために強化合宿を年に 8 回以上実施する
- ② タレント発掘事業でジュニア選手を 1 名以上発掘する
- ③ 6 月までにスタッフ体制を見直す

(2) 活動の成果

- ① 3 月に年間計画を作成し、フィジカルトレーニング&体力測定を 5 回 (6 月～10 月まで月 1 回)、また雪上トレーニングを 2 回(12 月～1 月)、合わせて 7 回実施した。
- ② NPO 全日本聴覚障害者スキー指導員会やその他団体、関係者の協力を得てタレント発掘事業を行った。
- ③ 体制事業 (ジュニア合宿) を 1 月に 1 回実施した。
- ④ デフリンピック経験者、元選手等有望スタッフを中心とした体制を作り、スタッフや選手間のコミュニケーションがスムーズにするために SMS 等を活用した

(3) 活動の評価

- ① スケジュールや予算上目標の強化合宿開催回数まで達成できなかった。しかし昨年度より合宿回数を増やしたことで選手個々の体力、技術等の向上が見られた。若手選手が加入し、初めての体力測定やトレーニングに慣れていなく技術レベルに差があった。また強化選手としての意識が薄い選手もあり、他選手のモチベーションに影響を及ぼすことがあった。
- ② 体力測定を行った大学に有望な選手が 2 名おり、アルペンスキーに興味を持ってくれ、声かけたが、そのうち 1 名は目的が異なり、断念し、もう 1 名は経済的理由により検討中である。
 - (1) 昨年度の反省からスタッフ体制の見直しを行い、本年度 5 月から新しいスタッフ体制となったが、スタッフの経験不足、スタッフ間の連携不足にて選手に混乱させてしまった。

(4) 今後の取組

- ① 各選手が意識改革を図り、目標を持ち、向上心を図るとともに人間性、協調性、主体性、自主性等の育みについても指導助言するよう今後も引き続き取り組んでいく。
- ② タレント発掘事業は継続して関係者の協力を得て有望な選手を発掘していく。
- ③ スタッフ体制の見直しをさらに行い、迅速に有効な SMS を活用し、さらに綿密にコミュニケーションを図り、混乱や事故が起きないように、スタッフや選手間の連携を図っていく。
- ④ 合宿は「強化選手」「ジュニア選手」に分け、それぞれの選手に合ったトレーニングメニューを設け、指導・育成していく。
- ⑤ チームの備品の老朽化が激しいため、購入の検討をしていく

2. アルペンスノーボードチーム

(1) 今年度活動の方針及び達成目標

- ① 選手若返りの初年度として、基礎体力向上とタレント発掘事業に取り組む

- ② ベテラン選手から若手選手への技術継承を図る
- ③ 平均年齢 37 歳の選手層を 20 歳台にする

(2) 活動の成果

若手選手の育成、タレント発掘事業として、今シーズンから新たに3名(女子1名・男子2名)がチームに加わり、4年後の冬季デフリンピックに向けて新たなスタートを切った。中でも数名は、技術、運動能力に変化が見られ、デフリンピック出場に対する意欲が向上してきたようだ。

育成選手の大半は、今シーズンからスノーボードを始める選手であるが、運動能力に優れているので初年度から基本動作も含めてゲートに初挑戦、成果を出すなど今後が楽しみな選手である。

一方、強化選手も4年後の冬季デフリンピックで初メダル獲得という強い意欲があり、練習に対する気持ちの入れ方に変化が見られた。

一年目を終えた現時点では、育成選手の技術レベルの底上げができたと思うが、更なる技術レベル向上には、細かな修正点が必要と感じる。来シーズンのオフシーズンに体力作りをしっかりとやり、シーズン入りまでに基本動作をマスターすれば、来年の今頃には更にレベルが上がっていくと想像出来る。

(3) 活動の評価

年間を通して、計画通りに進んだと感じている。ただ、育成選手の中には基本動作が身についておらず、ゲートトレーニングするにはまだ早いと思われる選手もいた。そんな選手でも、ゲートに入り一生懸命滑ろうという気持ちを出すことは凄いと感じた。

シーズン初めには全く滑れなかった選手が、シーズンの終わりにはレースに参戦、普通に滑れるようになったことは、とても評価出来るシーズンではないか。一方、強化選手に関しても、東北地区予選で優勝する等、昨年度より安定感が増してスピードが上がってきたと感じている。

いずれにせよ、今年度の強化合宿を通してターンに対する理解が身につけてきたことは、評価できる。

(4) 今後の取組

① マテリアルの購入について

今年度からアルペンスノーボードを本格的に始めるという事で、マテリアルに関する知識なしでボードやブーツを購入、選手自身に合わないボードやブーツになっていたため、技術向上が難しい面があった。シーズン途中で、マテリアルの交換やマテリアル調整でシーズンを乗り切ってきたが、来年度からは、きちんと本人にあったマテリアルを用意させたい。

今後またタレント発掘事業で今回のようにスノーボードをやった事がない若手選手が入ってくる事が予想される。その場合は、事前に相談してもらい、現在活動している強化選手の中古板等を借用、あるいは譲り受けて1年間様子をみてもらう。引き続き、選手として活動を続ける場合は、購入に進んでもらえた方がベストかと思う。

② フィジカル力の強化

アルペンスノーボード競技は、トーナメント方式のためレース中に滑走する本数が多く、レース途中でスタミナ切れを生じないように持久力と力や筋力をつ

ける必要があるが、今の選手たちにはそれが足りない。それと体の使い方、バランス能力、コントロール能力等フィジカル面も強化しないとイケない。これらを育成選手、強化選手ともにオンシーズン中に強化する必要がある。

③ 滑走日数の拡大

強化合宿の回数、滑走日数が、関東地区在住の選手には少なすぎると感じている。東北地区在住の選手は地元で滑り込むことで調整できると思うが、関東地区の選手はそれができないので強化合宿を増やす等して滑走日数を増やす必要がある。来年度に検討する合宿内容として、可能であれば少人数ずつ時期をわけてやる方が良いかも知れない。今年度は選手数が8名と一気に増え、雪上トレーニング、フィジカルでもきちんと見ることが難しくなった。聴者選手と比較するのは失礼だが、聴覚障がい選手の場合、コミュニケーション面で複数人数を同時に指導するのは難しい。

1対1の方が、伝わりやすく選手も理解度が深まると感じる。また、シーズン中の週末だけでは限りがあるので、平日でも強化合宿に参加可能な選手に対しては、平日行うことも検討しても良いと思う。

④ 育成選手の見直し

今シーズン、育成選手が新たに3名加わり選手は8名体制になったが、これまでの練習参加ぶりや練習態度を見て来年度は育成選手を見直すべきと感じた。冬季デフリンピックを目指して本気でやる気のある選手に対し、本人の意思、取組内容、体力、成績、態度等を総合的に判断、来年度の育成選手、強化選手を絞っていく必要があると感じている。脱落する選手がいた場合は、新たにやる気のある選手を発掘して入れ替えることはありだと思ふ。その場合は、発掘選手に対しては、最初からの指導になるが、コーチ陣を増やすなどで対応できればと思っている。

⑤ 冬季デフリンピック日本代表候補選手という自覚を持たせる

生半可な気持ちでトレーニングに取り組むよりも、「自分は冬季デフリンピック日本代表選手を目指してトレーニングしている」という強い信念を持ってトレーニングすることが大切。そういう気持ちを持って、一般レースに参戦、自分達の存在やデフリンピックの存在を周囲にアピールして欲しい。そうすれば、選手自身もトレーニングに対する意欲やモチベーションが向上するのではないかと。それが、他のところでスノーボードに取り組んでいる他のろう者達にも冬季デフリンピック出場という夢や希望を与えられるのではないかと。

3. スノーボードフリースタイル

(1) 今年度活動の方針及び達成目標

- ① 2017年開催予定のデフ世界選手権及び2019年冬季デフリンピックで好成績を収める為の若手発掘及び選手育成
- ② 平成27年度強化目標:12月までに男女ともエアターンの高さを肩まであげる。
- ③ バグジャンプ施設で男子6種類,女子4種類以上のグラブの技術を習得する。
- ④ 12月までに男子はフロントサイドとバックサイド両方とも1回転以上、
- ⑤ 女子はフロントサイドかバックサイドどちらかで1回転以上の技術を習得する

(2) 活動の成果

① 強化合宿の成果

オフシーズン（4～11月）は、ハーフパイプの滑走技術の基本となる空中への飛び出し、空中での姿勢、空中でのグラブ技や回転などを反復練習する為にバグジャンプ施設での滑走トレーニングを多めに行い、昨年度より難易度の高い技をケガのリスクを抑えながら挑戦及び反復練習を行うことができ、結果として体力向上及び、雪上（ハーフパイプ含む）における滑走技術を維持あるいは向上することができた。

また年3回、スノーボード専門のトレーナーに体力測定及びトレーニング指導を指導していただけたことによって、各々の選手の筋力トレーニング及びバランス感覚のトレーニングに対する意識を高めることができた。

オンシーズン（12～1月）はゲレンデで滑走トレーニングを実施した。

12月半ばから1月下旬まではフリーランを通して主にカービングターンの練習、硬いバーンや柔らかいバーンに雪の硬軟など様々な状況で徹底的に滑り込む事を繰り返し行った。雪不足により1月末に入って、ようやくハーフパイプ施設がオープンしたので、屋内ハーフパイプ施設とは雪質も形状も異なり、感覚を適応させる練習に集中した。

その結果、各選手の技量的不足点を早期に発見し正しいポジションに矯正することでシーズンを通して滑走技術向上につなげることができた。また、様々な起伏に対応したボードコントロール能力強化を高めることができた。

また、8月と12月には海外合宿を実施し、日本とは違う雪質、地形、生活環境に身体と滑走技術を順応させることができ、また日本では数少ない標高2000m級での滑走トレーニングを重ねることができた。

2月～3月は自主練習（自主合宿）を数回開催して、1月までの合宿で得た成果をより向上させ、デフ世界選手権及びデフリンピックで好成績を修められるよう取り組んでいきます。

② 若手選手の発掘

強化スタッフのデフリンピック啓蒙活動で中学生及び小学高学年の若手選手が2名加入してくれた。

(3) 活動の評価

【良かった点】

- ① オフシーズン中にバグジャンプ施設でハーフパイプの滑走技術の基本をみっちりトレーニングすることができた。
- ② 体力測定及びトレーニングを実施し、筋力トレーニングやバランス感覚のトレーニングに対する意識を高めることができた。
- ③ 海外合宿を実施する事により、日本での国内合宿では見つけられなかった課題を見つけることができ、どう課題を解決しなければならないか考える事ができた。
- ④ 昨年度より強化合宿の回数を多くこなせたことで各々の選手の滑走技術向上につながった。
- ⑤ 中学生及び小学高学年の若手選手が2人チームに加入し、育成の為の合宿を開催する事が出来て良かった。

【反省すべき点】

- ① 日本とは違う環境での滑走技術や国外での大会参戦に必要な行動を学べる機会がもっと必要だと感じた。

- ② レベルアップにつながる練習方法を学び、実践する機会が少ない。(選手一人一人の休暇取得状況、金銭的状況とコーチの都合がなかなか噛みあわない。)

【大会の成績及び評価】

1月～2月の毎月1回行われるFIS/SAJ大会(北海道さっぽろぼんけい)に選手らが参加した。

オリンピックを目指している健常者と一緒に参加したので、健常者の大会に対する姿勢等を色々学べたのではないかと感じている。

(4) 今後の取組

- ① コーチ及び強化スタッフで平成27年度の合宿とその成果を振り返り、2017年の世界デフ選手権及び2019年デフリンピックまでの指導計画を決め、バグジャンプ、屋内ハーフパイプ、雪上トレーニング(海外含む)、筋力及びバランス感覚のトレーニングの比率を決めた上で実施していく。
- ② 選手の年齢層が高くなってきておりまだまだ若手が少ないので、若手発掘及び獲得につながるようなアクションを考え実施していく。
- ③ 2017年世界デフ選手権及び2019年デフリンピックを想定して、次年度も海外遠征を通してどんな環境でもベストな結果を出せるよう指導に取り組んでいく。

4. カーリング

(1) 今年度活動の方針及び達成目標

【方針】

若手の育成(2名以上)を行い、これまでの強化選手と調整していく。

【目標】

- ① 5月まで→一般でのリーグ戦や各大会での上位入賞を目指す。
- ② 8月まで→強化トレーニングを取り入れ、若手選手を育成し、県外合宿を実施する。
- ③ 9月から→一般のリーグ戦や各大会に参戦し、若手と強化選手の調整をしていく。

(2) 活動の成果

- ① リーグ戦結果(青森県リーグ戦「バナナ杯」)
9月1日～10月25日 4勝1敗1分 2部リーグから1部リーグに昇格
10月25日～12月28日 2勝5敗 1部リーグから2部リーグに降格
1月4日～3月25日 5勝2敗 2部リーグから1部リーグへ昇格
- ② 新メンバーでの大会参戦結果
第6回強化合宿(東北シニアカーリング大会) 0勝4敗
第7回強化合宿(トライアル大会) 0勝2敗
- ③ 戦術会議では、青森県カーリング協会の協力で戦術コーチを派遣してもらい、これまでのチームの戦い(デフリンピックの全戦)の映像をチェックしてもらい、チーム戦術の足りないところを講義してもらった。

(3) 活動の評価

- ① このリーグ戦は、聴者チームを相手にシーズンを通して戦うため、戦術的また技術的な情報を得るためにも、また自分たちのレベルを確認するためにも重要

なものである。その中で、昨年度は3部から2部、そして1部へ昇格し、今年度は、メンバーが1人欠けた状態で、2部1部間をキープできたのは大きな自信となった。

- ② 新メンバー（新強化選手）を入れての試合では、1勝もできず、今後の課題を残した
- ③ 昨年までは、試合後のフィードバックが不十分なため、同じミスを繰り返したり、チーム内での戦術がバラバラであったりした場面が多く見られたため、今年度からは、ビデオ撮影をし、その都度確認をすることで、チーム内の戦術に統一感が見られるようになった。

(4) 今後の取組

県リーグ（バナナ杯）は、デフリンピック（または世界選手権）を目指すにあたっての、細かな技術目標を設定したり、モチベーションを維持したりするためにも、重要な位置づけになるため、参戦していく。

新しいメンバーを加えるにあたり、課題となるのは「コミュニケーション」である。来年度から強化選手として加えるメンバーは中途失調のため、今現在は手話がまったくできない。3年後のデフリンピックでは、手話でのコミュニケーションができるよう、まずはチームに馴染んでいくことがポイントになる。そのためには、これまで以上にスタッフの支援が重要になる。

戦術会議は、昨年度大きな成果を感じられた事業であったので、今年度も継続的に行う。特に、世界レベルでは昨年秋からこれまでとは違う方法でスイープをするようになり、その方法が世界大会での主流になりつつある。そのような世界レベルの動きを戦術会議で共有し、またテクニカルコーチを招いて、デフカーリングにどのように取り入れるかを早急に考えていかなければならない。

2. 財務諸表報告

平成 27 年度事業会計収支決算書	… 別紙の通り
平成 27 年度事業会計貸借対照表	… 別紙の通り
平成 27 年度事業会計貸借対照表	… 別紙の通り
平成 27 年度事業会計財産目録	… 別紙の通り
平成 27 年度事業会計収支簿	… 別紙の通り
平成 28 年度事業会計予算書	… 別紙の通り